

歯学生の喫煙行動と生活習慣、精神状態との関連

○藤田優子、牧憲司

九州歯科大学 口腔機能発達学分野

【目的】

大学生活は、人生のうちで最も有意義で充実した時期の一つである。その一方で、一人暮らしによる生活習慣の乱れ、飲酒、喫煙など、知らないうちに自身の健康状態を悪化させている可能性がある。特に喫煙は、がんや心臓病など多くの健康被害を及ぼすことは周知の事実である。そこで本研究では、現在の歯学生の喫煙状況と生活習慣、精神状態を明らかにし、これらの中から習慣的喫煙に関連する要因の予測を行った。

【対象と方法】

九州歯科大学歯学部歯学科に在籍する1年生から6年生までの429人を対象とし、年齢、性別、生活習慣、健康状態、精神状態（GHQ 12項目版）、本人と周囲の喫煙状況、喫煙に対する意識について質問紙法によって調査を行った。次に、対象者を習慣的喫煙者・非喫煙者の2群に分類し、上記の質問項目についてt検定、または χ^2 検定を用いて比較した。さらに、これらの検定で有意差を認められた項目を独立変数、習慣的喫煙の有無を従属変数として二項ロジスティック回帰分析を行った。

【結果】

習慣的喫煙者は全体で51人(11.9%)であった。喫煙率は、女性よりも男性のほうが有意に高く、習慣的喫煙者におけるGHQスコアと喫煙に関する意識のスコアの平均点は、非喫煙者に比べて有意に低かった。二項ロジスティック回帰分析の結果、年齢、性別、飲酒回数、父親の喫煙の有無、喫煙に対する意識が習慣的喫煙に有意にかかわる変数として抽出された。

【考察】

歯学生の習慣的喫煙は、年齢、性別、飲酒回数、父親の喫煙の有無、喫煙に対する意識の低さが関連因子となることが示唆された。男性は、年齢を重ねるごとに喫煙者の父親や先輩から飲酒や喫煙を勧められる機会が多くなり、これらがストレス解消の手段となっていると考えられる。したがって喫煙防止には、本人の意思の強さだけでなく、周囲の協力や、喫煙者が気軽に相談や治療を受けられる環境を整える必要があると思われる。

歯磨きカレンダーを用いた口腔衛生管理を行った症例

○塩野 康裕 森川 和政 鬼塚 一徳
迎 宮世 中村 仁美 牧 憲司
(九歯大・歯・小児歯)

【目的】軽度の自閉症と診断された患児に対して、小学校の養護教諭と連携して歯磨きカレンダーを用いた継続的な口腔衛生管理を行った症例について報告する。

【症例】患者：9歳、男児

主訴：左下の歯が痛い

既往歴：自閉症、精神発達遅滞

家族歴：特記事項なし

1.口腔内の状態

初診時の口腔内所見はdmf歯率が54%で多数歯にC2～C4の齲蝕がみとめられ、一部乳歯が残根状態であった

2.治療の経過

保護者、小学校養護教諭と治療方針について相談を行った後、全身麻酔下による保存治療ならびに抜歯術を行った。治療後は食事指導、ブラッシング指導を行った。視覚支援ツールとして歯磨きカレンダーを、正の強化因子としてシールを活用することによって、患児の自発的な歯磨きがみられるようになった。実際にカレンダーを運用したところ、スタートから21日間のうち20日に一日3回毎食後の歯磨きが実践できた。自発的な歯磨きはその後も継続された。また、全身麻酔治療から5か月後には保険を目的とした小児義歯を作成した。保護者と小学校養護教諭を対象に、義歯の着脱、清掃、管理について説明を行った結果、患児は日常的に義歯を使用することができた。

【考察】今回われわれは自閉症傾向のある患児に対して全身麻酔下による治療を行い、その後3年にわたって口腔衛生管理を行った症例について検討した。自閉症スペクトラム児の歯科治療においては個々の発達レベルや行動を考慮した上で個別化された支援方法を、診療室と学校と家庭が連携し提供することが効率的な支援のためには必要であると考えられた。